



茹だるような灼熱の夏。思い出したように吹き抜ける熱風が、更に体力を削っていく。

容赦なく照りつける太陽の下、立っているだけでも汗が滴るが、それでも完熟になった植物達は、急かすように成長するばかりだった。

暑さに耐えながらもトマトの収穫に追われる日々と、並行してトマティーナの準備に奔走する。

ようやく一息吐けるようになった頃には、カレンダーは9月に変わっていた。

怒濤のような収穫時期を終えた途端、今までの疲れが一気に押し寄せ、重い体を持って余っていたスペインは、ソファーに突っ伏すように寝転がっていた。

食事をする気力もなく、軽食で済ませようかと悩んでいた時、ソファーに僅かな振動が伝わってきた。

存在を示すように鳴り始めた携帯を、手探りで引き寄せたスペインは、目の端で相手を確認した途端、気合いを入れ直すように勢いよく起き上った。

「オ〜ラー久しぶりやん♪」

普段と変わりなく陽気な声で電話口に出たスペインに、淡淡とした声が返ってきた。

『お久しぶりです、忙しい時期は過ぎましたか?』

鷹揚のない声色に苦笑いを噛み殺したスペインだったが、電話口から聞えてくる愛しい声に、少しだけ気力が戻った気分だった。

「今年、めっちゃ暑かつて〜ん〜でも、あらかた片付いたで〜」  
意気揚々と告げるスペインに、安堵の息を零したオーストリアは、少しだけ口調を和らげていく。

『そ〜ですか、それを聞いて安心しました』

「の暑さ、ホンマに異常やと思わ〜ん?もう9月なのに、ちつとも涼しくなれへん」

敵しい残暑に文句を零すスペインに、異常気象とも思える気候に辟易していたオーストリアも、同意するように頷いた。

『ホントに、こちらもまだまだ暑い日が続いていますよ...』と  
ろで、明日の事ですが...』

世間話が長引く前に用件を切り出したオーストリアに、緩々と首を傾けたスペインは、呆気に取られる程、暢気な口調を

返していく。

「明日？なんやっけ？」

電話の向こうから、曖昧な沈黙が流れていく中、慌ててカレンダーに目を向けたスペインだったが、予定を確かめる前に、呆れ返った声が飛んできた。

『欧州定例会議の日ですが』

微かに怒気が入り混じった声で告げるオーストリアを他所に、今更ながら思い出したスペインは、納得したような声を漏らしていく。

「あゝ、そや、会議あつてんや、めっちゃ忘れとらたわ！」

頭の片隅にもなかつたと、暴露したスペインに、苦い溜め息を零したオーストリアは、電話をしてよかつたと、心の奥底から思っばかりだった。

『いい加減に参加しないと、忘れられてしまいますよ』

「えゝ、そんな事あらへんつて〜」

欧州のみで開催される定例会議は、主に周辺の国々だけのためか、参加国も少なく、参加の強制もない。

それぞれ、文句と云う名の主張を吐き出すだけの場が変わっている会議は、それほど重要視もされていなかった。

だからこそ、多忙な時期の欠席は、暗黙の了解となっている。それでも国である以上、参加する義務が伴う。

『先月も、先々月も、忙しいとからと言つて、不参加のままですよ、そろそろ顔を出しなさい』

苦々しい溜め息と共に突きつけられた苦言に、苦笑いを浮かべたスペインは、気乗りのしない会議に項垂れていく。

オーストリアに会えるのは嬉しいが、それ以上に会いたくないヤツとも遭遇しそうだからこそ、気乗りしない原因でもあった。

「そりや、そろそろ出なあかんさとは思つたけど、明日ちゆゝのがなあ……」

億劫そうに言葉を濁していくスペインに、無言の圧力が電話口から垂れ流されてくる。

気まずい沈黙が流れていく中、根負けしたように溜め息を漏らしたスペインは、無駄に使果たした気力を宥めるように、そのまま背後へと身体を倒していった。

微かな音を立てながらソファーに倒れこんだスペインは、改めて確認するように緩々と呟いた。

「オーストリアも行くん？」

『もちろん参加しますよ』

当然のように応えるオーストリアに、嫌な事はかりではないと思いついたスペインは、僅かに残っていた気力を振り絞った。

「分かった、行くわ…で、何時からやっけ？」

気急い口調で呟いた途端、怒声にも近い声が飛んできた。

『貴方と言っ人は一通達書すら見てないのですかっ！』

「そのまま説教に突入しそうになるのを避けたかったスペインは、次のお小言が飛んでこない内に、慌てて口を開いた。

「そんな、怒らんといて…なあ、ホンマに忙しすぎて、書類整理

とか全然出来てへんねんて〜」

泣き言にも似た言動に、嘆息じみた吐息だけで終わらせたオーストリアは、まだ言い足りない文句を飲み込むと、既に暗記している事柄を告げていく。

『全く…ベルリンに10時です、遅刻しないで下さいね』

「へ〜、今回ドイツなんや〜」

場所提供は何回かに別けて回っており、明日の会場がドイツなのを初めて知ったスペインは、淡い期待が脳裏を掠めていった。

しかし、それを遮るように戻ってきたのは、横柄な口調に近か

った。

『それがどうしましたか？』

無然とした態度のオーストリアに、微かな期待を頭の隅に押し寄せたスペインは、当たり前障りのない事を口にする。

「あ〜、近てええな〜って思っただけやで」

空々しく呟いたスペインに、諦観じみた溜め息を零したオーストリアは、一呼吸だけ間を空けると、わざわざ電話までした本当の要件を切り出した。

『泊まりにきますか？』

淡々と言い放つオーストリアに瞠目したスペインは、飛び上がるように跳ね起きていく。

「ス〜ええのん？」

食いつくように携帯を握りしめたスペインは、先程の気急さなど吹き飛ばし、目を輝かせるばかりだった。

『本当はその予定を聞いっと、電話をしたのです…』

照れくさそうに言い淀むオーストリアに、すっかり有頂天で舞い上がっているスペインは、意気揚々と言葉を続けていく。

「行くっ！何があつても行くで〜！」

『用があるなら来なくて結構ですよ』

必要以上に素気なく言葉を重ねるオーストリアだったが、それが照れ隠しである事も熟知しているスペインは、更に声を弾ませていった。

「ないってーあつても、何とかするーでも、今からやとあんま上等な土産とか用意できんけど勘弁してな〜」

嬉々としながらカレンダーに駆け寄ったスペインは、本格的に明日と明後日の予定を確認し始めた。

最悪の場合、今回も不参加で終わると思っていたオーストリアにとっては、端から過大な期待はしていない。

一番の目的を果たせたオーストリアは、安堵の吐息を零すと共に、満足そうに囁いた。

『構いませんよ、貴方が来てくれる事が、一番のお土産です』  
優しく綴られた言動に、今すぐ抱きしめたい衝動に駆られた

スペインは、離れているもどかしさを感じるばかりだった。

しかし、手を握り締める事で激情を押し込め込んだスペインは、ゆっくりと携帯を持ち直すと、歌でも歌うような口ぶりで囁いた。

「ロア、愛して〜」

『…の、お馬鹿さんが…き、切りますよー』

狼狽を隠すように小声で捲くし立てたオーストリアは、返事も待たずに通話を切ってしまった。

空しい機械音に切り替わっていく中、受話器の向こうで姿を想像するだけで、十分頬が緩んだスペインは、嬉しそうに笑った。

「ホンマ、可愛えんから〜」

楽しみが増えた事に胸を弾ませたスペインは、満面の笑みを浮かべながら、明日の準備に取り掛かっていった。